

# 亭漏西行

森 川 潤

(受付 2017年9月6日)

はじめに

長崎における周蔵に関する諸資料から、青木周蔵の長崎における足跡をたどれば、おおよそつぎのようが輪郭があらわれる。

慶応三（一八六七）年 六月 松岡勇記とともに長崎に到着する  
慶応四（一八六八）年閏四月 萩藩政府からプロイセン留学の辞令がだされる  
八月 長崎の外国管事役所から海外渡航の印章を交付される  
八月 高知藩の萩原三圭とともに渡独の途につく

海外留学の辞令において、はじめて「亭漏西」という留学国の名があらわれる。一年あまりの長崎滞在中に、周蔵は、他藩の萩原三圭と出会い、親交をふかめ、プロイセンを留学国として選択し、三圭とともに渡独の途につく。時間の流れの時折に事実がうかびあがるが、その間の闇は深い。

本稿では、高知藩の萩原三圭との関係に着目しながら、青木周蔵が留学国としてプロイセンを選択し、実際にプロイセンに渡航する経緯について検討する。

## 一 萩原三圭

まず、長崎からプロイセンに同行し、同期にベルリン大学に学籍登録した高知藩の萩原三圭の長崎における動静を瞥見しておきたい。

萩原三圭は、天保十一（一八四一）年、土佐国香美郡深淵村（野市町）の地下医萩原復斎（静安）の長子に生まれる。安政三（一八五六）年ころから同郷の細川潤次郎のもとで蘭学をまなぶ<sup>1)</sup>。安政六（一八五九）年二月には緒方洪庵の適塾に入門する。萩藩の松岡勇記は、すでに塾生として蘭学を修業していた。福沢諭吉は、安政五（一八五八）年に江戸にうつり、大村藩の長与専齋が塾頭をつとめていた。「静安俸」の三圭は、文久二（一八六二）年三月、「町郷浦種痘御用」を命じられる<sup>2)</sup>。大坂から帰っていたのであろう。中江兆民が萩原三圭のもとで蘭学をまなんだのは、このころである。

父復斎は、万延元（一八六〇）年十二月に「積年医業心掛宜手広療治」という功績により「三人扶持」を給され、「御用人格」にとりたてられていたが、文久元（一八六一）年十二月に「町郷浦種痘御用」を命じられる。

萩藩では、嘉永三（一八五〇）年二月以降、藩領全域で牛痘接種が実施される。藩の全域に種痘が行き渡るためには、藩医だけに依存することはできない。各宰判や給地から地下医や陪臣医のなかから西洋医学の心得があるものを二、三名ずつ選抜し、いわゆる種痘医として萩の好生館において伝習をうけさせる。周蔵の実父玄仲も種痘医にえらばれる。高知藩でも、種痘医が指名され、牛痘接種が奨励される<sup>3)</sup>。高知藩でも、西洋医学の修学歴がある地下医が郷村における種痘にたずさわる。

三圭は、元治二（一八六五）年三月、「西洋学為修行」長崎遊学を命じられ<sup>4)</sup>、改元後の慶応元（一八六五）年四月に精得館に入門する。高知藩から「三人扶持壹ヶ年金十五両」を給費される。三圭の実弟真齋も、慶應元（一八六五）年九月に「医学為修行」長崎遊学を命じられ、「式人扶持」を給される<sup>5)</sup>。

長崎には、外交上の必要から英語などの西欧語を学習するための語学所が設置される。語学所は、何度か改称し、語学所の時代に新町の萩藩蔵屋敷跡に校舎が新築され、慶応元（一八六五）年八月に済美館に改称する。学則が改正され、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、清語のほかに、歴史、地理、数学、物理、経済などの諸学科も教授される。長崎在住のアメリカ・オランダ改革派教会宣教師フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck）、何礼之<sup>が</sup>、柴田大介、岡田誠一などが英語を、長崎駐在フランス領事デュリイ（Léon Dury）、平井義十郎、名村泰蔵がフランス語を、フルベッキはドイツ語も教授する。松本良順の長子松本銚太郎はフルベッキにドイツ語をまなぶ<sup>6)</sup>。佐賀藩医の大石良逸（雪溪）の養子良乙は、慶応三、四年ころに隣接する長崎に遊学し、ドイツ語をまなぶ<sup>7)</sup>が、フルベッキに師事したのであろう。幕府直轄の済美館は、外国人教師が母国語を中心とした、諸外国で通用する現代語を学習するための学校にほかならない。

三圭は、慶応元（一八六五）年に長崎に遊学したさいには済美館頭取の何礼之の家塾に入門する。慶応元（一八六五）年のころ、礼之家塾には、鹿児島藩の前田弘安（正名）、岸良俊之丞（兼養）、金沢藩の高峰讓吉、佐賀藩の山口範三（尚芳）、徳島藩の高橋（芳川）顕正、錦戸広樹（のち陸奥宗光）など「塾生百数十名」、「塾外生二百名」がいた<sup>8)</sup>。三圭だけでなく、英語をまなぶ人びとには、大英帝国に留学したいという願望もあったであろう。

遊学期限が満期になったためか、三圭は、慶応二（一八六六）年九月に帰藩する。その後の三圭の動静はあきらかではないが、慶応三（一八六七）年五月には長崎にいた。父復齋は、長崎において「持病」を養生したいと藩に願いで、慶応三（一八六七）年三月に裁可される<sup>9)</sup>。三圭は復齋を同道したのであろう。同年五月二十日には、「萩原静安ノ子三圭、當分御雇ヲ以御臨時御用被仰付様、参政より被命」<sup>10)</sup>。六月十五日、三圭は「洋夷修行方」を命じられる<sup>11)</sup>。長崎精得館で研鑽する三圭は、高知藩の給費生に正式に採用される。

精得館には、幕府伝習生の大槻玄俊、緒方洪哉、戸塚静伯、土生玄豊、竹内玄庵、佐藤道

碩、松本銈太郎、池田謙斎、大村藩医の長与専斎、福井藩の山脇玄、橋本綱常（琢磨）、半井仲庵と実子元端、今井巖、徳島藩の長井長義といった諸藩の伝習生がいた。三圭は、幕府伝習生とも「一所に精得館で親しくして居た」<sup>12)</sup>。適塾以来の旧知もいれば、長崎で知りあった諸藩の伝習生とも親交をむすぶ。三圭は、精得館にかよい、幕府伝習生や諸藩伝習生とともにマンスフェルト（Constant George van Mansvelt）の授業に参加する。

高知藩大目付の佐佐木高行（三四郎）は、イギリス水兵殺害事件の調査と折衝を命じられ、慶応三（一八六七）年八月に長崎に来着する。九月になると、精得館にでむき、「蘭醫『マンセヘルドー』ノ診察」をうける<sup>13)</sup>。「病院」では、「幕府醫士竹内玄庵・池田謙斎、大村藩醫長與専齋等」がたちあう。佐佐木高行の伝記史料<sup>14)</sup>には、九月以降、しばしば三圭の実弟である真斎の名がみられる。高行は、真斎をともない、「製鐵所」、「米軍艦見物」にでかける。高行が京都の藩屋敷にあてた書状は、「軍艦・炮銃等御買入ノ事」といった項目のなかで、「西洋へ書生急急差立度事」という留學生の海外派遣についても言及する<sup>15)</sup>。留学候補として、真斎の名があがる。真斎は、「兼て御見込も有之候」人物である<sup>16)</sup>。高知藩は、海外に留學生を派遣しようと計画するが、慶応三（一八六七）年十月の時点では、三圭は留学候補ではない。

## 二 プロイセンの選択

青木周蔵は、慶応三（一八六七）年六月、長崎に到着する。萩藩が幕府と敵対していたために、萩藩の人びとは天領長崎はもとより、幕府直轄の精得館にでいりすることはできない。周蔵は、鹿児島藩蔵屋敷に潜伏し、松岡勇記とともに大村藩医の長与専斎の「講習」にくわわる。専斎は、大坂適塾の塾頭もつとめ、長崎では適塾系人脈の中心にいる。専斎は、大村藩の伝習生であるが、精得館では、幕府伝習生からも一目置かれる存在である。

周蔵は、専斎や勇記をともし諸藩の伝習生と知己を得る。そのひとりが専斎や勇記と適塾時代の同門であった萩原三圭である。三圭は、周蔵よりも一ヶ月ほどまえに、二度目の遊学のために長崎にたどりついたばかりである。しかし、二度目の長崎には、旧知もすくなくない。

周蔵は、長崎にたどりつくと、海外留学の実現のために萩藩医団にはたらきかけたり、「野稿一章」のような留学嘆願書を藩政府の中枢に書きおいたりする。長崎にたどりついたころに作成した「野稿一章」は、海外留学の必要性について強調するが、留学国については言及しない。

周蔵は、着崎後二十日ほどたった慶応三（一八六七）年七月には、萩藩医団の指導的地位にある竹田裕伯と日野宗春にあて、つぎのように書きおくる<sup>17)</sup>。

幕より之頼ニ而佛国杯ハ吾國より遠遊仕事少し六ヶ敷候、和蘭モ其氣味有<sub>レ</sub>之と申事ニ候

得共、和蘭ハ強而之事モ有<sub>レ</sub>之候間敷奉<sub>レ</sub>察候、兎角官許有<sub>レ</sub>之候節ハ和蘭ト御書下ケ可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>、之御願可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>候ハ、尤半春兄御氣付有<sub>レ</sub>之候ハ、決而不同意ハ不<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候、併生シモ先日迄ハ英行ト決意罷在候得共、近日承<sub>レ</sub>之候得ハ和蘭、獨乙、米利堅、佛杯よろしくと申事ニ御坐候、尤形勢ニ因而建議仕候トキハ吾国及薩土嘉輩ハ英行可<sub>レ</sub>然候得共、次ノ一首篤と御坐考可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候

醫者スレハ初ハ和蘭

后獨乙もどりに遊べ

英の龍動

周蔵は、「先日迄ハ英行と決意」していた。それは、萩藩とイギリスが親密な関係にあったからである。「英行」は、藩政府の意向でもある。しかし、長崎での交友や見聞をとおし、「和蘭」、「獨乙」、「米利堅」、「佛」などが留学国の候補に浮かびあがる。幕府とフランスとの外交関係を顧慮すれば、「吾国」、すなわち萩藩からフランスに留学することは困難である。オランダも幕府とのあいだに友好関係をたもっているために、留学は困難であろう。しかし、藩政府から海外留学の許可ができれば、周蔵は蘭学の徒としてオランダに留学せざるを得ない。もっとも、「同行」に想定される半井春軒兄に異論があれば、それを尊重しなければならない。

「形勢」、すなわち外交関係を考慮し、留学国について「建議」すれば、「吾国及薩土嘉」、すなわち倒幕派四藩のものは「英行」が当然である。しかし、戯れ歌は長崎の医学伝習生の意識を反映したものである。医師は、はじめは「和蘭」におもむき、その後、「獨乙」でまなび、「英の龍動」に立ち寄ってから帰国すべきである。「獨乙」が留学国のひとつとして浮上する。「獨乙」は、外交関係を基準にした留学国候補ではない。

周蔵は、医師の海外留学の必要性について藩政府や萩藩医師団に上申をくりかえすが、「留学地選定」という課題はのこしていた。しかし、医学伝習生ばかりでなく、居留地の外国人医師と接し、同時代の西洋医学の情勢を垣間見るようになると、プロイセンが留学国として浮かびあがる。オランダ人教師は、伝習生に「独逸学」、すなわちドイツ医学の研究レヴェルのたかさをつたえ、「独逸学」を推奨する<sup>18)</sup>。長崎の伝習生のあいだには、ドイツ医学が世界的に卓越しているという認識が共有される。実際、長崎の伝習生は、明治初年のプロイセンに参集する。

青木周蔵は、留学国としてプロイセンを選択する。周蔵が長崎から書きおくれた書簡からは、その経緯について窺い知ることはできない。周蔵は、プロイセンを選択した理由について、後年の回想であるが、つぎのようにつづる（筆記第一）。

留学地選定ノ事ハ一個ノ先決問題トシテ予ノ最モ意ヲ用キシ所ナリ從來長藩ヨリ海外ニ遊学セル者七八人アリテ孰レモ英国又ハ米国ニ留學セリ然レトモ予ハ専修学科ノ如何ニ

關セス李魯西以外ニハ断シテ留學セストノ決心ヲ以テ其ノ旨ヲ政府ニ稟申シ其ノ許可ヲ得テ同国ニ赴キタリ当時我国ニ於テハ英佛米三國ノ名最モ人耳ニ熟セシカ故ニ此ノ三國ニ留學スルハ邦人ノ見テ以テ首肯スル所ナルモ李國ニ留學スルカ如キハ世人太タ之ヲ奇怪トシタリ、然レトモ予カ多数人士ノ意向ニ反シ敢テ李魯西行ヲ決定シ、併セテ政府ノ許可ヲ請求シタルニハ重大ナル理由アリ、即チ從來予ノ閲讀セシ和蘭医書ハ大半独人ノ著述ヲ翻譯セシモノナルノミナラス、予ハ某蘭書中ノ一項ニ於テ「凡ソ學問ニ於テハ能ク独逸ノ右ニ出ツルモノナシ」トノ數語ヲ讀ミタルヲアリ、此等ノ証左ニ據テ推測スルニ、研究最モ困難ナル医学ニシテ斯克著シク發達シ蘭人仰テ以テ其ノ師ト尊崇スル李魯西國ニ於テハ其ノ他ノ学科モ亦必ス他國ニ卓越セルモノアルヘク

周蔵は、「李魯西以外ニハ断シテ留學セス」と決意する。障害になったのは、海外留学を裁断する藩政府中枢の先入観である。それはどの藩でもみられる先入観である。萩藩留学生は、イギリスかアメリカに修学の間をもとめるのが慣例であった。かれらは軍事関係の留学生である。周蔵は、「李國ニ留學スルカ如キハ世人太タ之ヲ奇怪トシタリ」という先入観をうちやぶり、藩政府から同意を得なければならない。

周蔵が、プロイセンを選択したのは、第一に「從來予ノ閲讀セシ和蘭医書ハ大半独人ノ著述ヲ翻譯セシモノ」であるからである。精得館に架蔵される「これらの書物は大概獨逸の原著について蘭人の自國語に翻譯したのじやつた」という認識<sup>19)</sup>を伝習生は共有していた。第二に、蘭書に「凡ソ學問ニ於テハ能ク独逸ノ右ニ出ツルモノナシ」という一節を目にしたからである。「研究最モ困難ナル医学」が先進的な地位を得ているだけでなく、ドイツ医学が、日本人が師として仰視するオランダ人の師表にもなっている。周蔵は、医学研究が世界的に卓絶するプロイセンにおいては、「其ノ他ノ学科」も欧米諸国を凌駕するにちがいないと考える。第二の理由は、いわゆる先進諸国の影にかくれたプロイセンにおける学問研究全般のレベルがたかいことを強調したものである。ドイツ・ヴィッセンシャフトの移植に先鞭をつけた周蔵が後年に付加した理由である可能性もある。

もうひとつの障害は「同行」である。萩藩は、海外へ留学生を派遣するばあい、単独で送りだすことはなかった。長崎に送りだされたころには、松岡勇記が「同行」に想定されていた<sup>20)</sup>。しかし、周蔵は「松岡生義同行可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>願度候得共、本文之実行自他輕薄之處行千万有<sub>レ</sub>之候間、縦令交刺して死スルトモ不<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>候」として、勇記を忌み嫌う。同年八月には「同行」として「半春兄」、すなわち萩藩医団の重鎮である半井春軒の名があがる<sup>21)</sup>。春軒も、海外留学の希望をいただいていた。春軒は、周蔵よりも八歳年長の天保七（一八三六）年の生まれである<sup>22)</sup>。春軒は、好生館にまなび、安政二（一八五五）年には舎長に任ぜられる。文久二（一八六二）年には、長崎におもむき、松本良順の門生としてオランダ海軍二等軍医ポンペ（Pompe van Meerdervoort）の医学伝習にくわわる。しかし、春軒は禁門の変に



より長崎を退去せざるをえなくなる。翌文久三（一八六三）年以降、春軒は好生堂から派出され、下関砲撃事件、四境戦争における傷病兵の治療にあたる。戊辰戦争が勃発すると、「半井長兄同行」が不可能になる。周蔵は、藩医師団に「一先生獨行之御配意可被遣候」と願いでる<sup>23)</sup>。

周蔵がプロイセンという留学国をあげ、選択の理由を付した留学事由書を藩政府に提出したのが、いつごろであろうか、特定することはできない。戦闘が東漸し、全国規模に展開しはじめると、従軍医が不足しはじめる。もはや同行者について議論する余地はなくなる。留学事由書には、同行者として他藩の萩原三圭の名があげられていたことも考えられる。棚上げにされていた事由書が裁可され、慶應四（一八六八）年閏四月九日付で周蔵に辞令<sup>24)</sup>がだされる。

研藏嫡子

青木周蔵

右醫學爲修業亭漏社被差越候付一ヶ年七〇〇ドル宛三ヶ年分勘渡被仰付候事

辰閏四月九日遠近方へ渡ス

長崎における周蔵に関する資料のなかに、はじめて「亭漏社」という国名があらわれる。数日後には、「青木洋行修業金御内用」が長崎の周蔵のもとにとどけられることになる<sup>25)</sup>。

それからほどなく、三圭の身边に動きが見られる。高知藩在京家老深尾重先、通称鼎が、藩用金四十万両の調達、武器の買い入れ、外国船舶借り入れの交渉のために、慶應四（一八六八）年閏四月上旬に参政の真辺栄三郎をともない長崎に到着し、五月一日まで滞在する<sup>26)</sup>。重先は、藩主山内豊信（容堂）の信任があつく、京師詰として慶應四（一八六八）年二月の堺事件の事後処理にもあたる。周蔵の自伝には、つぎのような記述がみられる（筆記第二）。

曩日長崎ニ於テ足下ヲ予ト同シク亭国ニ留学セシムベシト貴国（高知）ノ藩老深尾氏（鼎）ニ説キシ時深尾氏カ亭国トハ方角違ヒニ非スヤト云ヒシ

周蔵が長崎で重先と面談したとすれば、重先が長崎に滞在するあいだのことである。この一節から、ふたつのことが窺われる。ひとつは、三圭がすでに高知藩の海外留学の候補であったことである<sup>27)</sup>。戊辰戦争勃発の報に接した長崎奉行の河津祐邦が倒幕勢力にとりかこまれた長崎を脱出し、長崎は無政府状態におちいる。長崎在留の高知藩の佐佐木三四郎、鹿児島藩の松方正義（助左衛門）、佐賀藩の大隈重信（八太郎）が中心になり、長崎会議所をひらき、長崎奉行の権限をうけつぐ。二月には、九州鎮撫総督の沢宣嘉が参謀の井上馨（聞多）をしたがえ、長崎にはいり、長崎を統治する。「醫學校及病院ノ長タル幕府ノ醫員等」も韜晦し、「荷蘭醫官」、すなわちオランダ人教師マンズフェルトも「醫學校及病院」への出勤を拒絶する。三圭は、佐佐木三四郎にはかり、マンズフェルトを説得し、「醫學校及病院」を再開

させる。三圭は、長与専斎とともに精得館の再興にかかわる。実弟の真斎ではなく、「醫學校及病院」で頭角をあらわした三圭が海外留学の候補である。

もうひとつは、周蔵と三圭がすでにプロイセンを留学国として選択し、同行することで合意していたことである。

周蔵は、重先にたいし、「足下」、すなわち三圭を「予ト同シク孝国ニ留学セシムベシ」と要請する。周蔵が留学国の選択に主導権をとったかのような記述である。重先は、ドイツは「方角違ヒ」であるとしてうけいれようとしませんが、周蔵は「凡百ノ學科ヲ修ムルニ於テ独逸諸邦ニ優ルノ国ナキ」と反駁する（筆記第二）。プロイセン選択の第二の理由である。他藩の一介の医師が高知藩家老の意見を弁駁するような情景が現実にあったであろうか。自伝を書きつづっている時点での地位は逆転していた。周蔵は子爵、深尾家（重孝）は男爵という新秩序の地位関係が自伝につきまとう挿話をうみだす。

重先は、三圭の留学を保留にし、五月はじめに京都にもどる。三圭は、五月二十一日、高知藩開成館の長崎出張所、長崎商会の主任である岩崎弥之助につきのように願いでる<sup>28)</sup>。

先達テ父復斎ヲ當地ヘ誘來ル處、近日爲引取度、右ニ付一寸御國許ヘ罷越、且修行ノ筋ニ付浪花ヘ立寄り度

三圭は、翌二十二日、「公邊ノ火船」、すなわち高知藩の蒸気船に搭乗し、長崎をあとにする。「浪速」にたちよるのは、「佐川大夫」、すなわち高知藩家老深尾重先に面会し、「修行ノ筋」、すなわち海外留学について請願するためである。三圭は、プロイセンを選択した理由や経緯を説明したのであろう。萩藩の周蔵と同行することにも言及する。三圭は、「西洋行御聞届ニ相成」、七月十七日に長崎に帰着する。岩崎弥太郎は、「金ノ周旋」、すなわち留学資金の調達を命じられる。

萩藩の医師と高知藩の医師のプロイセン留学は、個別的にはなく、連動しながら聴許される。両藩ともに、海外に留学生を送りだす必要性を認識していた。周蔵だけでなく、三圭も海外派遣要員とみなされていた。しかし、両藩ともに倒幕軍をおくりだし、軍事費の調達に難渋していた。「一書生ノ運命ノ如キ之ヲ顧慮スルニ暇ナク」（筆記第一）という状況にあった。

### 三 渡航

新政府は、旧幕府が慶応二（一八六六）年に公布した触書にもとづく開放的な海外渡航制度を継承し、慶応四年四月、海外渡航事務を開始する<sup>29)</sup>。「掟書」も、そのままうけつがれ、「願濟之国々之外猥りに他国へ罷越滞在等いたすへ可らず帰国之期限を延引すへ可らざる事」、「外国之人別に加り候儀ハ勿論他国之宗門ニ入るへ可らざる事」、「御条約の趣を守り誠実を以外国人と相交へき事」と規定する。諸藩の留学生も、新政府の渡航制度のもとで、神奈川、

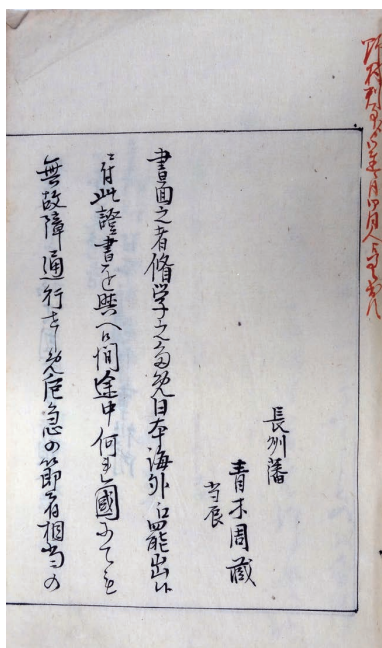


図 御印章願留

兵庫，大阪，長崎の裁判所において印章，すなわちパスポートの交付を申請し，「学科修業」のために海外へ渡航しはじめる。

周蔵は，藩をとおり印章の交付を願いで，同年八月二十日付で印章を交付される<sup>30)</sup>。

長州藩

青木周蔵

当辰

書面之者脩学之為免日本海外江罷出候ニ付  
此證書を與へ候間途中何れの國にても  
無故障通行せし免危急の節者相当の  
保護有之候様其國官吏へ頼入候

日本長崎府

慶応四辰年八月廿日 外國管事役所

三圭も，八月二五日付で印章を交付される<sup>31)</sup>。

土州藩

萩原三圭

當辰二十一歳

書面之者脩学之為免日本海外江罷出候ニ付



此證書を與へ候間途中何れの國にても無  
故障通行せしめ危急の節者相當之  
保護有之候様其國官吏へ頼入候  
日本長崎府  
慶応四辰年八月廿五日 外國管事役所

慶応四（一八六八）年八月，本木昌造によって日本初の地方紙「崎陽雜報」が創刊される。第一号には，つぎのような記事がみられる<sup>32)</sup>。

長崎滞在ノ「プロイス・コンシュル」リチャルト・リンドウ此頃横濱ヨリ港ニカヘレリ。然シテ今日廿五日フランス國ヘ向ケ出帆スル由，長州ノ醫生，青木某，土州萩原某當モ官許ヲ得テ同人ニ從ガヒ洋行ス。プロイス國ハ醫學修業ノタメニハ隨一ノ場所ト聞ケリ。長崎駐在プロイセン領事ノ「リンドウ」が，先日，横浜から長崎にもどり，「今日廿五日」，フランスに向け，出航する。「リンドウ」は，「長州ノ醫生青木某」，「土州萩原某」を同道する。ふたりの「醫生」がプロイセンにおもむくのは，プロイセンが「醫學修業ノタメニハ隨一ノ場所」であるからである。

第一に，長崎出航日は「今日廿五日」，すなわち慶応四（一八六八）年八月二十五日である。三圭は，同年九月十二日付で香港から佐佐木高行にあて書簡をおくる<sup>33)</sup>。

拜啓，崎嶼發程時には，別て御懇命相蒙，難有仕合ニ奉存候，奉別後益御勇健御奉職ノ御義，奉遙賀候，隨て私義，客月廿八日上海著，二日間滞留，本月朔同所拔錨，航海三日にして，四日午前香港著，當所にて明十三日迄歐洲行船便相待居候中，昨日横濱便に，藻鹽草雜誌に官軍大敗走ノ風説を齎らし候より，同リ<sup>道カ</sup>リンドウ氏（リンドウ氏ハ李國岡士にて，長崎に在留せるに，正月十四日，長崎奉行河津守より援助を乞たる時，同意せる者也，）雀躍不斜，私及青木周藏ノ面前に於て，公然土州人も長州人も仕方がない，私ノ厄介者なりと，傍若無人ノ體に有之候，畢竟同氏ノ佐幕家たることは曾て存居らず，切齒扼腕ノ至に候得共，無致方候，右は官軍全體ノ事には有之間敷，只脱走兵等一時ノ僥倖ならんと被察候得共，兎ニ角不快なる風聞に候へば，旅中ノ杞憂御憐察奉憚候，先は乗船に臨み取急候儘右而巳奉得貴意候，餘は爲邦家御自重奉專祈候也，

一行は，「客月廿八日」，すなわち八月二十八日に上海に寄港し，二日間，滞留し，九月一日，上海を出航し，四日午前に香港につく。書簡は，「歐洲行船便」を待つあいだに書いたものである。三圭は，八月二十五日付で印章を交付されると，即刻，香港航路の船に乗船したことになる。

第二に，周藏と三圭は「同人（リンドウ）ニ從ガヒ洋行」する。各地の開港場では，それぞれに人望がある商人が名誉領事にえらばれる<sup>34)</sup>。長崎居留地には，クニッフラー商会

(Kniffler & Co.), シュルツェ・ライス商会 (Schultze, Reis & Co.), リンダウ商会 (Lindau & Co.) などのドイツ系商社が設立さる。長崎では、クニッフル商会が領事職をひきうけていたが、一八六七年五月 (慶応三年四月) にアメリカ系の大商社ウォルシュ商会 (Walsh & Co.) の共同経営者であるリンダウ (Richard Lindau) がプロイセン領事に任命される<sup>35)</sup>。リンダウは、慶応四年閏四月にはオールト商会 (Alt & Co.) に移籍する<sup>36)</sup>。

どのような経緯から、周蔵と三圭がリンダウに随行し、渡独することになったのであろうか。萩藩は、駐日イギリス総領事ガウワー (Abel Anthony James Gower), ジャーディン・マセソン商会 (Jardine Matheson Holdings Limited) の援助により、文久三 (一八六三) 年五月、五人の藩士をイギリスに密航させる。萩藩は、イギリス系商会、駐日イギリス外交団とはたがいに近親感をいだき、親密な関係をきずくが、プロイセンとの関係はみとめられない。高知藩は、長崎に商会をおき、諸外国の商人と取引きをおこなう。長崎商会の岩崎弥之助は、慶応三 (一八六七) 年十月以降、しばしばリンダウと面談する。十月十三日には、リンダウが弥之助をたずね、「白糸並樟脳取組談判」する<sup>37)</sup>。翌慶応四年七月には、弥太郎が「ヲルス商會」にリンダウをたずね、「木船並金策ヲ談ズ」<sup>38)</sup>。萩藩とはことなり、高知藩は外国商社とかかわり、ウォルシュ商会の共同経営者であるリンダウとのあいだでも商談をすすめていた。

周蔵は、萩原三圭とともに、プロイセン長崎駐在領事リンダウにとまなわれ、長崎を出航し、一八六九年五月 (明治二年四月) にベルリンにたどりつく。プロイセンへの途次、リンダウの加療静養のために、マルセイユに一ヶ月半、パリに二ヶ月滞在する。この旅にはプロイセン海軍二等医官も同行していた。リンダウは、任地で病魔におかされ、療養するためにプロイセンに帰国したのであろう。リンダウは、道中、「土州人も長州人も仕方がない、私の厄介者なり」とふたりに怒号をあびせるほどの「佐幕家」である。しかし、かれらは、リンダウの紹介により下宿に住みこみ、ドイツ語の学習に専念する。

青木周蔵と萩原三圭は、新政府の海外渡航免状を取得し、最初にドイツに到着した日本人留学生である。

#### おわりに

本稿では、青木周蔵が、どのような経緯でプロイセンを留学国として選択し、プロイセンへの渡航の途についたか検討した。その経緯は三段階からなる。第一が、周蔵が留学国としてプロイセンを選択する段階である。藩地においては、周蔵はみづからが蘭学の徒であるという自覚から、また萩藩が親密な関係にあるという外交関係から、オランダイギリスを留学国と想定していた。長崎にうつると、長与専斎や松岡勇記を仲立ちとした交遊のなかで、学術的な観点からプロイセンが留学国として浮上する。長崎の伝習生は、オランダ人教師がオ

ランダ語を媒体として西洋医学を教授するが、それがドイツ医書にもとづく西洋医学にほかならないことを熟知していた。しかも、西洋医学の研究水準という点で、ドイツ医学が世界的中心であるという認識を共有していた。周蔵が留学国としてプロイセンを選択したのは、「凡ソ学問ニ於テハ能ク独逸ノ右ニ出ツルモノナシ」という確信をえたことにもよる。

「稟賦ノ醫者嫌ヒ」の周蔵は、医学を隠れ蓑としてプロイセンを選択する。しかし、それは周蔵の個人的な選択にすぎない。

第二は、周蔵が、懇意になった高知藩の萩原三圭と海外留学の実現のために画策し、プロイセンを留学国として、それぞれの藩から許可を得る段階である。萩藩だけでなく、高知藩も、戊辰戦争に藩兵をおくりだし、「一書生ノ運命」を顧慮する余裕もない。慶応四（一八六八）年三月には、新政府は新政府の成立を内外に宣言し（五箇条の誓文）、四月には江戸城が無血開城する。戦局がおちつくと、萩藩政府は周蔵が提出していた留学事由書を取りあげ、事由書にあげられたプロイセンという留学国と選択の理由について吟味する。長崎は、すでに新政府が統治し、精得館も管轄下においていた。医学の世界的な研究レベルについて、伝習生が共有していた認識は新政府の中枢にも共有される。

第三は、周蔵と三圭が長崎駐在プロイセン領事リンダウにしたがひ、長崎を出航し、渡欧する段階である。ふたりがリンダウと偶然に同船したのではなく、リンダウが依頼をうけ、ふたりを長崎からプロイセンの首都ベルリンまで送り届けたのはたしかである。リンダウとの接点をたどれば、高知藩がリンダウと商談をすすめていたという事実にいきつく。高知藩の依頼ではないとしても、プロイセンにおもむく周蔵と三圭が、プロイセンに帰国するリンダウに随行したのは事実である。

## 【註】

- 1) 「故ドクトル萩原三圭君小傳」、『中外医事新報』第三三三号、明治二七年二月、四九頁。
- 2) 「医師年譜」一ノ二、土佐山内家宝物資料館所蔵。
- 3) 平尾道雄、『土佐医学史考』、昭和五二年、高知市民図書館、一〇四頁。
- 4) 「医師年譜」一ノ二。
- 5) 同上。
- 6) 古賀十二郎、『長崎洋学史』上巻、長崎文献社、昭和四八年（昭和四一年初版）、二〇〇頁。
- 7) 大沢謙二、『燈影虫語』、杏林舎、昭和三年（東京大学生理学同窓会編、一九七九年復刻）、二八頁。
- 8) 大久保利謙、『幕末英学史上における何礼之一とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流』、鹿児島県立短期大学『研究年報』六、一九八七年三月、三三頁。
- 9) 「医師年譜」一ノ二。
- 10) 「公用日記」慶応三年五月二〇日の条、岩崎弥太郎・岩崎弥之助伝記編纂会編刊、『岩崎弥太郎日記』、昭和五〇年、一二二頁。
- 11) 同上書、一三〇頁。
- 12) 池田謙斎口述、医海時報社員筆記、『回顧録』、入沢達吉、大正六年、三三頁。
- 13) 東京大学史料編纂所著刊、『保古飛呂比』二、一九七二年、四六九頁。
- 14) 『保古飛呂比』二、五〇七～五〇九頁。

- 15) 一〇月一三日、『保古飛呂比』二，五三二～五三三頁。
- 16) 『保古飛呂比』二，五三六頁。
- 17) 慶応三年七月一八日付，薩劔大嶋洋一（青木周蔵）書翰，竹田裕伯・日野宗春宛。
- 18) 「相良翁懷舊譚」一五，『醫海時報』第五二一号，明治三六年六月，四三三頁。
- 19) 池田謙斎，『回顧録』，二一頁。
- 20) 日野宗春宛書簡，慶応三年六月二八日付，「日野家文書」，「諸家文書」，山口県公文書館所蔵。
- 21) 日野宗春宛書簡，慶応三年八月一八日付，「日野家文書」，「諸家文書」，山口県公文書館所蔵。
- 22) 『防長医学史』下，一九～二二頁。
- 23) 日野宗春宛書簡，慶応四年一月九日付，「日野家文書」，「諸家文書」，山口県公文書館所蔵。
- 24) 「洋學則」自安政五年七月至明治元年，「毛利家文書」，山口県文書館所蔵。
- 25) 明治元年閏四月十三日の条，一坂太郎・蔵本朋依，『久保松太郎日記』，マツノ書店，平成一六年，七五二頁。
- 26) 『岩崎弥太郎日記』，二九五頁。
- 27) 明治元年正月，『保古飛呂比』三，一二九～一三〇頁。
- 28) 『岩崎弥太郎日記』，三〇四頁。
- 29) 「外国行ノ者へ印章交付方」，明治元年四月二三日付，『太政類典』第一編，第六十一卷，外国交際，諸官員差遣，文書第三十七，国立公文書館所蔵。
- 30) 慶応四年八月二〇日付「御印章願留」慶応四辰年改，長崎奉行所運上所掛，長崎歴史文化博物館所蔵。
- 31) 慶応四年八月二五日付，同上。
- 32) 『崎陽雜報』第一号，（慶応四年）自七月至八月，長崎歴史文化博物館所蔵。
- 33) 明治元年九月，『保古飛呂比』三，一九七二年，三三五頁。
- 34) 生熊文編訳，『ギルデマイスターの手紙』，有隣堂，平成三年，六〇頁。
- 35) 川崎晴朗，『幕末の駐日外交官・領事館』，雄松堂出版，一九八八年，二三一頁。
- 36) 「（慶応四年）閏四月 外国人品人名前調帳」，長崎県立長崎図書館編刊，『長崎居留地外国人名簿』Ⅱ，平成一五年，一二九頁。
- 37) 『岩崎弥太郎日記』，一五〇頁。
- 38) 同上書，二〇四頁。

Zusammenfassung

Der Lernprozeß von Shūzo Aoki vor dem Fahrt nach Deutschland 4  
—— Schiffahrt nach Preußen ——

MORIKAWA Jun

Wie verbracht Shūzo Aoki in Nagasaki, kann man die folgenden drei Punkten bestätigen.

- 1) Ankunft in Nagasaki im Juli 1867
- 2) Befehlsempfang für Studienaufenthalt in Preußen im Mai 1868
- 3) Empfang des Reisepasses und Abreise nach Preußen mit Sankei Hagiwara im Oktober 1868

In dieser Studie möchte ich untersuchen, wie Shūzo mit Sankei Hagiwara, einem medizinischen Student der Kochi-Regierung, bis ihren Abreise sprach.